新編水滸畫傳 三編 壹

へ21
875
21

唐本百回本翻譯

高井蘭山翁編譯
葛飾北齋主人畫

新編水滸畫傳

三編 全十冊

浪華書林 岡田羣玉堂製本

遠21門
875
21

新譯水滸画傳三編總目録

前帙五卷第二十三回中より二十八回の始末

明治三十年 十月十日購求

卷之弍拾壹　景陽岡ふして武松虎を打　王婆賄を貪て風情を説
卷之弍拾二　其下
卷之弍拾三　鄆哥忿ずして茶肆を鬧しむ　王婆西門慶を計嗾む
卷之弍拾四　淫婦武大郎を茶鴆を　鄆哥大小授官廳を鬧す

巻之弐拾五
武松闘て西門慶を殺す
母夜叉孟州道ゑて人肉を賣
武松十字坡ゑて張青ゑ遇
後帙ゑ巻第二十八回ゑ第三十三回ゑる
武松威安平寨を鎮る
巻之弐拾六
施恩義をもつて快活林を奪ゑ
施恩立て孟州ゑ霸ゑ
武松醉に蔣門神を打
巻之弐拾ト
張都監張蒙方武松を陥る
武松大に飛雲浦を開く
巻之弐拾八
張都監血鴛鴦樓ゑ滅
武松者夜蜈蚣嶺ゑ走る
巻之弐拾九
武松者碑て孔亮を打
錦毛虎義をもつて宋江を釋す
巻之三拾
宋江夜小蠻山を看
花榮大に清風寨を鬧す

巻之三拾

新編水滸画傳卷之弍拾壱

東武　高井蘭山翁　譯編

○景陽岡ふして武松虎と打

武松い撲海郡の葉大官人の館と辭し。故ゝ同り兄武大郎と訪んとて道と急ぐ。陽谷縣の界き來。酒肆と尋ゝ酒食と用んとする那ふ。大文字の旗と立る酒場と見み壮しく弛入て呼て云るハ。主早く酒と啓で我ふ賣。主是と聞て。武松が前に拿る武松ゑいに杯と執てもや一盃と飲乾。別主に向て云るハ。此酒も量の好むべき味と。別に佳肴めゝが与へんや。主ゞ云ひ處ゝ來ぬ。肴ぞ。只一色牛肉のみこれあり。これと用ひぬんや。武松ゞ云夫い極と好肴ぞ。疾拿來れ主吹て二斤の牛肉と切て大盤に盛て捧る、武松

られを暑うして。再び一盞を砂乾て云るハ。武酒極めて味猥き美酒にて
又一碗を酌乾酒是に尽られども色辛ゝて酒を篩ざりれハ。武松大ふ咏
て云るハ。僅に只三碗の酒を与へ。再び酒を添ざるハいかゝ。ゆく来て酒
を篩。主ゞ云牛肉を再ひ出ゞ。尚一向そ来りかうん武松ゞ云我先酒を再
んゆく酒を添よ。主ゞ云牛肉を再ハ出ぬ。ゆく遠これを添ん酒のこと
ハ再び添かも。武松ゞ云我價を与ることをまゝ。彼も再び酒を賣ざるぞ
主ゞ云貴客ハ何ぞ〻能て益を〻羅を見ぬハざるや。ゆ明に三碗不過岡の又
大字を掲ゆ。武松ゞ云我も嘗ゆんどもいうるゆえれとゆ。主ゞ云
我ゆ酒ハ。村酒とゆども却て老酒の滋味あり。是加ふゆ人を醉しむ
凡旅客ゆ酒を三ゆん飲ときハ。忽大に醉て。ゆきゆの是をゆるゝ能ゆ。是
にゆて十人ゆ七八人ハ能好一二碗を飲で。三碗を飲人ハ極て少ゝ。

美三碗の外ゆ飲時ハ。立所に大に醉倒。是を〻ゆんハさて垂ゆ門外
ゆ於て碎倒ゆ去ゆ。是別三碗是を〻ゆ云ゆ武松笑て云
ゆるハ。唯かくのごゝ渭のゝゆゆ。我是を飲ゆゆ。我今已に三碗を飲
ゆれども〻て醉ざるハいかゝ。主ゞ云我ゆ酒ハ遠瓶重也。又ハ出門倒ゆも
名く。ゆゆ酒ゆ味ゆきゆゆと。又〻べつに者ゆ初ゆ入ゆゆ極めて
飲易ゆ。後れども遂に飲了て門を出ゆゆと。出門倒と名
づく。是を酒ゆ毒ゆ也ゆ。遠瓶と名ゆ。武松ゞ云汝かくのごゝ。
を〻ゆんゆ。再ゆ三碗を篩来れ。我是を飲で汝に見ん。武松ゞ云
ざるを着て。又三碗を与ふ。武松飲で大に不美云るハ。酒ゆ一向
に篩来て与へゆ。主ゞ云。客必ず酒を〻ゆ。ゆ醉倒れ
ゆゆ。是を療治せん薬ゆ。武松ゞ云汝何れかゝゆ。

り。家汗をぬぐうことめくべ。我まさにふるえてもあるべし。彼れ我身あるとうくこれをこぎ出さん。何ぞべつに怕るることめくんや。宜くつき来るべし。今れ止とを拔ぎ。又一杯に三盃を食し。狂一向をぬぐべつぐしめられば。うち又三碗をつぎぬ。武松これをひといきにのみ尽し中盃渇にしたがひ弥んとを思ひ。且懐中より銀を取出しまさに与へて云ふハ酒肉の價ひ銀ふて足るべきぞ。主ら云。武尚多く飲りわり。貼錢を与へやうんや。武松ぐ云つりせん文に足まべ。只宜く酒を与へよ。主ら云ふ客官酒を取ってのんとるべ足数又六碗の酒を与へんが為ぐ〳〵ハ足を飲まんと雖うも武松ぐ云。盃数又六の酒のみべ。てさも剥ぎつき来ら与へよ。我ひとりのんでんすべしうち云。客うのごとく大きと言ふ酔倒れ。ぬ又六人のかうてい扶けおこさんと雖うも武松呵〳〵〳〵笑ひ倘我彼に扶け起さうとめくべ。誓て大丈夫を見まで。主ら行これを仕ぐべ〳〵。酒を出さしむべ。武松大ひに焦燥て雷のごく吼て云ふハ我彼が酒代白々飲にあるべ。何ぞ再こ我怒を惹出さんや。果〳〵て我云ふ背くことへあるべ。此店を微塵に碎冊〳〵て立地に後悔をあらしめん。主ら哭て武松ぐ扶ひ出さんとを忍れ。又六碗の酒を篩与へ。彼又時をも移さず〳〵〳〵飲果〳〵て忽ち力を起〳〵て云。我ら一点も違ぜ向後彼彼等を門前に立るとかうん。三碗ふ〳〵て悪をろべ〳〵へ。実に可笑〳〵て死がごく〳〵に跑出ず。主ら云ふハ客官に行れの方に往ずんぞや。武松笑て蹌往て云。我彼ふ酒の價已に清〳〵〳〵。又何事あて我を吼やうんや。我ハ是一片の好意ぞ。てせん客先我れ囲て去ら掛ぎる。榜と見る。武松ぐ云。武

武松景陽岡
上に大虎を
擊

司の榜を見て何の益かあらん。立ち去れ。然面の京陽郡に今一つの猛虎
あり。晩に及べば必ず出て人を害ず。頃日已に二三十人の豪傑を咬殺せ
り。汝等速に帰り。攻戸に命じて。彼虎を捕ふとへども。あざ見を切べし
辺の人家に就て官司が榜を掲ぐ。往来の旅客に虎あることを知
しめんが為なり。況や単身旅する人は白日にもなほ恐る。時の間の事なり。
況や単身旅する人は白日にもなほ恐る。時の大勢を徐合せ。一団に
思ひとるべし。今は巳未の末申の初の時なれば必ず思ひとるべ
れ。汝等一我が言を。容ひぬはぜん。必ず一命を傷れぬべし。今青は先に
里に歇うぬひて。牧人日日に待て。二三十人一所に思ひとるべ
武松見て笑ひて。我は清河縣の者なり。武京陽岡を過る
と凡二十餘度に及べども。虎あることを聞ず。詐の言を

云て。我を誤まらんとす。彼ひ虎あるとも。我又見を怕ん。汝等益のこと
云ん。速に立ち去れ。我は見好きを以て。実客を救ふと欲
す。汝等見を信じぬはぜん。且我家に来て。榜を看よ。武松が云
我等を虎を恐れず。汝我を留んとするは必ず害ふ為なり。我は命を
害す。乃ちひ行李ホを取んと。立ち去る。我は見一片の言を
信て虎あることを告るに及て見を知ぬ。「汝はぬ大ひに不礼なり。上は
兎も角も。客の心ホ任せぬとて。遂に巳が家に帰る。武松は此時
行李を拾ふ様を知て。ひに提出に京陽郡を過て。地上り。漸くに
又里ばかりを過て。郡の下ホ立て。一の大樹あるを見て樹の皮
を剝て。白き処に大ひの文字あり。武松頗驚怪の文字を識ぬ。
ひに首を擡て見を看ひに文ホ曰。近因景陽岡大虫傷人俱有過

往容商可方巳午未三個時辰結駅成隊過岡勿請自誤と
書付らう。武松これを看了て。呵〻と歩笑ひ乃ち紙中ふ〻ひるハ
見初て被酒店のまゞ詐の計なるん。かく書徒して。往来の旅人を嚇
し。もゝかち已ゞ郡に一座をさ〻めて。必ず事を写るるゝんよし遮莫。
我代持ゞに多に捉ば。器の上に伏の恐れるめゝんとて。直に進んで器
ふ上り来る代時まで申の刻ゞ日も漸く西山に傾ぬ。武松
ハ酒奥に楽じて。酒さもう器を呑んで上り来り。繰す墨ゞ路を馳て。
侍に一つの山神の廟ある所に通りぬ。武松別ち廟門の上とゝろに一
張の榜に官府の印めるを貼ぬ。其榜の文ふ云く。陽谷縣爲這景
陽岡上新有一隻大蟲近來傷害人命見今杖限各郷
里正并獵戸等。打捕未獲如有過往客商人等。可於巳

午未三個時辰結伴過岡。其餘時分及單身客人白日不
許過岡恐被傷害性命不便。各宜知悉と云ひしぬ。武松代
友府の下める榜を見て。まゝに自ら器の上に虎あるとを全く信じ。
幾乎再び酒店に回んと欲して。遂ふ身を回しるが忽ちに中に思ひ
るハ我若今回ることあゞ。必定彼ふに笑られん。是大丈夫の恥べき所。
て吸り跳しに代持ゞに持ハ縦ひ鉄石の虎なりとも。終によく微塵ち打
碎んものと。又雪を奮て只顧足ふ信せ進上る。代時又歩りに酒の
碎出上つて。ゆゞ恐しく笑しゝ。別笠を脊梁ふ負。棒を小組に按で
器の上ふ進上りし処ふ。日もとゝ山の端に沈で忽ち暗し。時い十月の天
氣ゆて日短く夜もつゝして尤晩るに易し。自ら独云ふ吸り云るハいえ
ど虎めゝん。人こふ吸怕して器ふ上りゝ。我何ぞ器を怖んやと又歩

歩と徐〻しべ碎いやすゝ小発〻只浪々踈々と一歩ハ高く一歩ハ
低く天を下ふ足地を上ふ見て渺樹林の内に走り入ぬ。此所奇ひふ。
一ツの大なる青石あるれば。杖て拳を倚に建て。乃ち身を躍して石の上ふ
歩倒れ只枝く一睡せんと思ひ〻処に忽ち一陣の怪風起り沙を走せ石を
飛ばし。猿ふも龍現く雲巡ひ虎生れば風従ふと云るに今果して風
の生ずるハ虎の出へき験。彼怪風已に過ぎ処。樹林の背後大ひふ響
く声あて吊睛白額の大虎躍り出て跳来る。武松是を見て忽ち石
の上より跳りかの拳を捨て石に倚て拒ふ。かの虎ふく武松を白眼視
んで大ひに吼り吼て跳躍る。武松元来眼明ふ小ゑ枝を雪支なれ
虎の来るを見て急に身を閃し。拳を勝して虎の背後小続り出。虎又
爪を竪縦を組。武松ふ飛うる。武松再び閃りと避て倚に跳躍く。彼

虎あどくまで。武松に避れ大ひふ恚り怒て霹靂の如く吼りそゝれば
山も岳も震ひ崩すうと疑ふ。武松又身を回して左の方に跳搬
尚眉間に拳をゑ〻晴ふ畜生脚を飛遶し。方に好武芸の秘術を尽
さんと和何ふ凡虎の人を拿ふ。只一搬の内に人をうるに已に今こそ
に到るまで。武松ふ躱れ閃され〻ば。虎の勢ひまづ半を過せり。彼虎
虎は元来の虎ふわ〻ざる由を再び大ひに怒り吼て。電のごく跳る。武松
此時を見すまし拳を双てふ抱て。ひせの勇力をつくして歩ふに忽ち
大にひぐくとめて倚の松の木ふ歩著。枝をつねをとゝして二ツ歩ハ
ぬ。彼虎も又原来眼明ふて武松ふ歩てうるを見て。急ふ躱れめる。武松
拳の余りつゐに松の樹ふ著〻ん。武松慌て見をうるに手拳も又半うり
歩折う。武松狂わも怪ぞ。拳の末ぞを小拿牙をうゝめを瞋〻虎を

[illegible]

瞧れば虎見て大に驚き再びくと躍して武松に跳かゝる武松
まゝ力を奮て右の傍に繞出乃ち十歩ばかり引退ひて拳をちゝ振
忽ち大でを突て飛かゝるに彼虎が双の眼をくと押れば虎は雷の
ごとくに吼て武松を掙れんとせ〻如に武松勇力を出し半点も緩寛ぜ
ず彼虎滑稽〻として武松右のあとをあげ虎のこゝろを奪んで一向ひけ
ども彼虎又忽ち大に吼て前足のつゝを以て歩に地上を抓遂に一
の土坑を穿り武松見てこゝに安ひのことを知ひ力を信せ虎の嘴を
去坑のうちに押へ勢ひ奈〻して再三踢て十脚許彼虎別力に踢
られ〻を眩〻うい来力つきて掙れとあ〻ども武松は時龍のごとく
とゝく撲へ〻きのごとく鉄鎚のごく拳を振り縱に平生の力をいたし
頻續打ふ凡そ七十拳打れば虎も今は大ひに苦〻めるの裡

ふ〻り鮮血涌流て遂に息絶吼る聲を止め乃もたゝ斃れり
武松平生の神威を振ひ胸中の武藝に仗て斬猛き
虎を晡時の頃に殺し〻ば古今稀有の勇夫〻時虎死
るとこゝてゝを敢ち再び松の樹の下に行て彼打棒を拾ひ来
死さ〻ゝるこゝを又二三拝歩て乃ち心中に思ふやう我は
虎を掩て是を取て彼酒店に行て今宵一宿せんと双てを拳虎を
掩り起さんとすれども恰も茅行の手をさゝぐ寸歩も拽ぐに不有名
の大力なれども先ゝ園て来力を疲ひ肢も疲軟今は死虎を撃起
るこを難うして武松又書石の上に坐し熟〻思ひるに天色已に暗ふ
して他方の光景冷〻で覚へる若又一つの虎出来るこもあ〻ば我は
疲いんどゝく敢〻はん乃ち明日の沙法ふすゝとて石を下り林

とも。思をさぐり再び下を尋んで半里ばかりゆくに。拈華の叢裡より。
支匹の大虎飛出ぬ。武松見て大ひに驚き騒ぎて眼を睜ども。
暗にんと見しづめ。我命竟にこゝに罷るべし。見天命の時来ることを
ゝく窺ひ見るに。その二つの虎勿ち立起て人のごゝく奔立に。武松見て
怪しきことに思ひ睛を定めて克くみるに。見列あ個の人。虎のうへの衣
服を思し。てに五股又を持ぬるの人武松をみて大に驚きあ
人ひとこゝを発。今こゝふ来るハ何ものぞや。汝ゞ辺ふ攫来るとせば。思
独り思ふらくゞれ。ゞつふ汝ゞれ人おて、ゝるめしゞ武松ゞ云汝あ人ハ又
何ものぞ。その方を云我ゞ。こゝうちのゝ戸こ武松ゞ云汝今こゝふ来るに虎の
うへを思するハいうるいとれぞ。彼ゞ云客ハまゞこのそのうへふ大虎めるを
ゝゞるや。今ゞ京陽思の上ハ来ゝ彼虎人を傷ひ。ゝ戸も已に七八

人害せゝれぬ。往来の旅人を傷害せゝハを数をゝに。ゞれ清縣の
知縣相公ゞ云文下て。酒村の里ふより。我ゞ猟人ふ命じて。これを
捕へゝ先ゞふ捜れをかの虎勢ひ猛くして。近づくを能ゞ。後に毎夜ゞ
辺ふ立てかくゝちゞくゝ知何ふ今者も続て十余人の害こに罹伏して。虎の
勢を侍ぬ客思を下て来ゝ。ゞ郎て虎をゝんと疑ひゝ。客い実に何
ふの人れゞ。今時ゞ小思を経て来りゞふ。ゝて虎ゝを遇ざりしや。武松ゞ云
そも我ハ見清河縣の者ゝて。名を武松と号ゝ。今思の上林の辺ふて。
大虎小遇めるを我ゞ拳を以て彼虎を歩殺ゝぬあ人のゝられゞ必て
大ひふ驚れ疑て云るハいんぞよくゝるを知んや。ゞ言ゞ武松ゞ云
汝等のいよく信ぜぎんゞ我衣の上を見ゝ粧猟として血を滅ぬあ人
ゝ云。汝ハ如何して彼虎を殺ゝぬるぞ。武松ゞ時虎を殺ゝる始後の

働。佯りて彼笑しべ。衣人半ば喜び。半ば愕然。乃ち彼十餘人の中を
を呼集るを。武松は岸を登るに。吾を小ば捨刀弓矢鳥銃ホを拿
て来りぬ。武松列彼衣人の獵戸ホ宮て云るは。は數人ハ何の者。是を上
つて虎は捕べ。くこれ虎を。衣人ど云かの大虎捕めて猛さ故是を上る
こ結び。唯は不ル堪ル恨し。遠矢ホ射ん。ん。ぬ。汝ハ是いるる勇力
るれば。容易那大虎を殺しぬ。乃ち彼數ホ虎を殺しる。徐通
ぜ。を一人も信ぜる者ホし。は時武松は人に對して云るは。汝ホこれ
を殺て。今我を不ホつれ行られを見せん。は人是を聞て云。すでに彼のごく
如て容ま捉ひ行く着んとて。ホ迷ふ六把の炬松を點し。是く武松に
從ひ。再び是を上り来る。武松已に林の辺に到り。彼死虎を指さして。は
人に見せめられを。は人これを見て。是ば声を放て天ホ叫び地ホ轟び

云るハかくの。死猛さ大虎を。只一人の力を以て歩殺せ。を。寔に天神ホ
めぬ。ぞんば。誰ぞ。これをおさんや。を内ら一人ハ先は地の里正の家に後進に
独行ぬ。又は、ハは死虎を緊と縛り。乃ち六人ホこれを擔せて。是を下り
る処に。七八十人の衆夫ども辺に出迎ふ。乃一束の轎ホ。武松を請て乗せ。
直に里正ホ家ホ擔来り。里正ハ自ら門前に出迎へ。即ち武松を延て草
堂ホ到りぬ。衆夫各かの死虎を舁て。茅堂の前ホ置り。形て村中忽て一
に十の獵人ホ尽く来て。武松に相見て問るハ。豪傑の高姓大名いかん。
又何ぞ。人ぞ。何ぞ。ハ汝ひ奇ひ。は死を。るるるよや。武松ぞ云来ハ是青
地の鄰郡清河縣の者。て姓ハ武。名ハ松と号ル。は度滄州ら故ぞホ
ぬ。んて。今日は辺の酒店に立倚。大ひに酒を飲て是に上りし処に。
乃ち大虎ホ遇ひ。これを歩殺。始強一て小強し。弦の獵戸

死虎を擔ハしめ武松を官府ふ入しむ

たこれを吟ず。大ふ感じて云ふ。ハテハ実に世に罕なる豪傑こそ。しかの
ごとき豪傑にあらざんば。誰か能く彼虎を殺せんやと。やがて酒食を
設て武松を歓待ぬ。武松ハ虎を殺して大に疲しかば速に歇んと思ふ
如ふ。里正もそれに歇ふと投げ。佐て歇しむ。武松疲んでも夜ハ里正が鼓
に歇ふ。翌日ハ里正人を縣裏に弛て。虎を殺しる次第。具さに口述
を写し。知縣相公に作ふ。此時武松も又某堂の上に生らしが。里正
ふ〳〵びに村中の父老を多く食を備へて武松を管待ぬ。武松法人と
坐を列。一〳〵對面をなし。終て盃を挙て飲酌を始めり。法人が云
ふハ彼虎が害せし人数ハ多ひ豪傑此所に来りて。今日幸ひ豪傑に逢ふ。此虎を殺して害を除きなひめんと。第一村中の人民悉く
福を蒙り。第二ふハ往来の旅人悉く禍を免る。豈に豪傑の賜にあ〳〵

ばや。武松これを聞て云思ふに是何ぞ手ぶの力のなに所ぞ。
別に他村中の禍を軽んぜ手を出ふ彼虎を殺しぬ法人又皆く武
松に酒を勧め。盃已に收りて翌日に陽谷縣の知縣相公ら。使ちまて。
乃ち武松ふ對面し。終て武松を待て。轎に乗しめ。又彼虎をも
轎の前ふ擡せ。直に陽谷縣ふ迎回りれば。高所の人民ふハ。一人の豪
傑。糸陽岡にて虎を殺しるを吟。ふ〳〵出を爭ふて弛来り。街に充
見物し。武松轎の内に在てこれを見るに。猛雲霞のごとくにお集り。肩を
擦背を挨。直ちに虎を迎へて見物し。甚騒動をなす。始終鳴を止
ざりき。既にして武松知縣が衙門の前ふ到し。終て轎を下り。廳
前に進み入れば。下皮らも又彼虎を擡て。同く廳前に置。此時知縣ハ武
松が猛さ揩を看。又彼綿毛の虎を見て。心中に恐ひ驚く。第此大

漢子ら勇にあらぶんば徒らかくのごとき大虎を。殺もてとなんや。暗に是を怪ひ。乃武松を呼で廳上に登しめられば武松謹で廳前に跪伏す。時知縣問て云。虎を殺しる勇夫い汝よる。汝いんじてうる猛虎を。一人の力を以て殺しるや。武松答て始終一くお告しぶ。廳上廳下に坐を列ねる衆多の役人ホ。一くこれ言を聞てどれ凡人の不ると思ハれず。皆皆舌を振て驚きけり。知縣大に感悅し。乃盃を執て武松に酒を賞し。武松恭でこれを飲了りしば。知縣又村中に觸て。賞銭一千貫を輸め。別に武松に褒美を。武松ら云系こ度村中の禍ひを剿で。不意に彼虎を殺しぬ。原系ら力の能ふあらぶ。何ぞ敢て擅に皮府より褒賞を受んや。系ら村の獵戸等。相公の命をまつて虎を殺さんとて。多日多く銭財を費しひと。然くいこ湯を彼等に分ち与ふ。なんぞ系源く相公の仁ん恩を感ずべ。知縣ら云汝已に公の恩で宮く汝ら系不但に也し。武松大に銭を。弦獵人ホに分与ふ。知縣これを見て。心中に深く武松ら大厚仁徳なるを感じ。別ち武松を攙擧て職を授け。高地に為ん。と思ひ。別武松に對して曰く。汝ハ原是清河縣の人なるば。我こ湯谷縣とハ。僅に咫尺の間を隔るのみ。我今汝を以ひ知に為んを。然よりて汝既の職を授んに。汝肯て高地ホ為りて職に就んや。武松拜謝して云。是相公肯て系を攙擧ふ。系恩なりとい。ども。又殺て大るの労を歇ん。知縣是を愛て大ひホ悅び。随即ホ押司の職を。高唐の役人を呼で商議を定し。日武松を攙擧て歩兵都頭となしぬ。かの里正等弦の獵人ども。悉く来て武松を賀し。一連に又六日喜びの酒を約

う。是より武松ハ陽谷縣小至て已に數日を過し。只顔色中小思ひ煩ふ。我もと孔目に向て兄を探索んと欲し居るに。恐くハ武朗て放逐する。兄を玉中に影しうども。未だ兄に遇ざる事。全く心を安んぜず。迯日好便を求めて。消息を通ぜんと思ふ。主人ハ先に果に楽しで。縣系に走て。班彼を續り。南地の風景を賞めらう。時小武松が背後小人ありて。呼りるハ。武朗ハ今日發程を遂て。いんぞ我を見外ふいするや。是迯なるうん次をうるせし

○王婆賄を貪て風情を説

武松ハ後背を顧て。今須臾掛しい兄武大郎を見ず。忽ち地上に跪伏して罪を謝し。既を捲云已に一年餘り對面せざりし事。日夜心小絶り憂しに先恙なきを何うの福ぞ。只あるべいうるてうて。武地小

ゑり。あひしや。武大郎ガ云。汝ハ人々を出て。若干の月日を過しうるに。何ぞ一封の書簡も寄ざる。我ハ思ひ煩ひぬ。武松ガ云いんぞ怒ぞ。あるひハ思ひぬ。武大郎ガ云怒しハ。汝清河縣小て碓粗の上人を扶側して。れんを逐ー小依て。官司より我を責て。汝ガ行向を問ふを。凡一月餘り。手事明白ならず。大ひに苦を受ぬ。這ぞ汝を怒しー。又近き比我妻を娶れり。孤を後生寄。倩為る人小我家小踏入て我を欺き侮り。大に狼藉を働きぬ。汝ハ敢て敢てかゝる無礼をゑさんやとて。汝を恐ひぬ。是ハ我清河縣小住居して安んずるを。後ぐ。南地に移来て。今已に僑宅の新うく貧き営を。扨ハ武大郎と武松ハ一腹一世の兄弟なれ。手を取て志。大ひに悲しうるべ。武松ハ身の出ハ尺小偉り。相貌堂々威風凛々として。ちもあ膂小千百斤の氣力を有ちぬ。若

かくのごとくうるぢんぱいんぞよく彼大虎を殺すことを得ん。又武大郎ハ長
ハ尺に満ぢ。そ形極めて癯し。清河縣の人。皆武大郎かく名
の長短さを以て渾名をつけて。三寸釘谷樹皮と呼ぶ。又彼武大
が娶る妻ハ。そ比清河縣にて一人の富老人あるが。許多侍女の内一人
の家生の侍女潘金蓮とて。二十許なる新及閣る美人。彼富老人
数度閑戯をおせども。彼侍女ハ家の老管家に。はを通ぜんと思ふ
と旧久し。故に為てを人の云ふ従ぢ。剰へ妻に新と造ぶ。夫婦是ゆえ
及を慶ぶ。若干日為て睦じくゐて。主人大に怒り。彼女を
逐ひ出ス中に。ふりるハ高地第一の醜き男を撰び出し。彼潘金蓮を配
せて。そ仇を報ぜんと。武大郎を選び出して多く金銀を武大郎に与へ
乃ち彼侍女潘金蓮を以て。武大郎が嫁し。果して大ひに潘金蓮

を恥辱ぬ。ひ沙法に方ふ学へて。人皆希有の思ひをなせり。乃ち彼後生者
ぶ。尽く来る。再三武大郎を消遣ること。彼潘金蓮ハ。亦来及侍女ゆ
る。形鄙しき武大郎が嫁しぬれど。心大ひに怒ずして。且量に色を慰
ひ。武大郎ひ時武松が行て云ふハ。我清河縣より出て。稼ぎ別に
定し家業もなれども。只餅を賣て。活ふ。今日も已に街に出てこれを
賣人と欲しぬ。我向に街が在て。法人の云を聞くに。京陽岡に虎を
お殺しる。武氏の勇士。既に今高地が為つて。彼の職を揚ぬと。
そ凡慌ぬ。我已にこれを察し。武氏の勇士と汝をゝんと。
七八分料り。果して汝こそ。まづ宜しく我家に。至り別離の憂を
彼り慰むべしと。遂に武松を率て私宅が赴き。壺が紫石街を通ん
弛来り。別一方の桑坊の間壁に。至て武大郎門を敲く。門ゆ一人の女

出。彼芦簾を揭げて門を開き。乃進て云るハ。丈夫今日ハ何由か遅く
敗り給ひしぞ。武大郎ゞ云。我弟武松ハ遇ひ難き。半途より携引せり。汝
等ハ対面すべしと。乃ち武松を引て内へ入。三人坐を列て武松慇懃
ハ河嫂ハまゝ匿ゞ武大郎まづ妻に告て云るハ。頃日流人ハ過
る。清陽岡ハて大虎を打殺し。新に都頭の職を受ぬる人ハ乃ち是
我弟武松ニ書これを受て来て内ひ出で云るハ。叔〻敬ふ。何の変ひに
今日兄弟再ひび来臨ありや。武松も別義て云るハ嫂〻敬ふ何故
かく慇懃ハ礼を延ぬやと。忽ち跪き地上に拜とすれハ。彼妻
自ら武松を扶け起して云るハ。叔〻這程に拜とす給ハ。却て我と
苦めんとの事なり。我いとゞ妾りに拜を受て冥〻ん武松ゞ云。嫂こハ是
我兄ハ後ひの人なれハ。我が拜を受ぬよしも。何の不是あらんと強て拜

とすれハ。彼妻又云るハ。昨日我と人の云を聞つるに。一人の豪傑素
陽岡ニて大虎を打殺し。別日も人も縣裏に来りて見物の夫婦
恰も蟻のごとく湊ひて。武松を奪ひ去れ。我も幾許か見て世間の
表像を知て。出ざりし不に豈知らんや彼豪傑と云ハ。叔〻の事たてあ
よ。今日こゝに来りぬふして。我夫婦の福。先樓に上りて今日ハ空しく流日
待り給へと。遂に武松を引て樓に登りぬ。武松此女を見て眉ハ初
春の柳葉に似て。眼に雨を恨雲の愁を含。顔ハ三月の桃花のごく
ふて。晴に風の情。月の姿を羞ぬ。花容窈窕貌妖嬈として芳容窈窕
なり。此時三人樓に上て坐已ハ定りぬ。彼妻まづ武太郎ハ対して
云るハ。我聞く叔〻に陪して待べし。丈夫急に酒食を設け給へ
ぬ。武大郎ゞ云。我も別こそ男ひつまき。武松まづ心を寛げ待べし。我ハ

利同て共に一盞を傾んとて遂に樓を下りる。彼妻熟々武松が人物を看て心中に思ひるゝ。我夫武大郎と此武松とを。京日胞の兄弟なるに何ぞかくのごゝ雲泥のごゝひあるや。此奴武松八尺の長八尺小雄り。人形に爽こ。我りゝ〻うの男子に嫁しゝ。無駄ぢゝん。彼兄武大郎ハ身の丈に五尺に満ぢ人物更に醜こ。我いなる報ひて。彼漢子るゝ嫁しるぞ。何ぞ此武松を引めく。此如に移さしめ遂に我一点の情をも亟べきものと。虚蓑地ふ拉びぢ乃ち涙面ふ笑を浮して武松に問て云るゝ。叔々尚地に知りぬひてよりは来二十日ぬり沙もなるべきを。武松答て云。来尚亟に立て今日方に十八日ふ及ぬ彼妻の云叔〻今何れの如ふ居住しゝふぞや。武松が云。未だ定まらぬ。僅ざる曲阜縣相公の衙門の内に居住いるゝ。彼妻が云。

叔〻かくのごゝくんハ実て不自由にあゝんん。武松が云。来独身のとるれば別に不自由の事もなく。却て胡夕乞安し。況や来が下の雑兵ら。皆に来て我ふ事ふ。故に我自らふ足を労するとを。彼妻が云雑兵ホいんで雑乞を用ひて。叔〻に事をあるとわゝんや。那くい我家ふ移て一所ふ住しゝ。独〻我自〻食物を調へ。朝夕乞を進めやさん。乞雑兵ホが乞に觸る食物ふ狂も清うん。武松が云嫂その恐情感謝に堪ざゝ。彼妻又問て云。叔〻ハ年幾ぢくふるりるふや。武松が云来彼〻に二十五歳ふ及びぬ。彼妻が云。叔〻今年二十五歳なゝば。我ホ三歳長一ぬふ。叔〻ひ度ハ何れの如ふ。尚地ふ知りぬひぬるや。武松が云。我れ〻を出てより八涂州に一年あり。遐爲し一向兄のとのこんふ勉りし事。不思涂州を出て。元と探ぬんとせ一如に思ひ此如ふて

対面を遂ぬ。彼妻ガ云。我等夫婦ハ此処ニ搬来シ事いたを縁故多シ。我叔くの兄ハ嫁シてよりハ。人皆夫の悪きなるハ楽シて。一向繁夫婦を欺負ませ。清河縣の住居なりゲく。遂ハ此所に移り来れり。向に家かくの如くなる強雪なる叔くあるにめゝび。推うめへて我夫を欺く。況わゝんや。武松ガ云。我兄ハまた系に仰る所なり。唯く老実を頼りぬふ。是却て大ひに可ゝ。彼妻ガ云。叔く何れかく顛倒シる言をいひぬふぞや。況ハも人剛骨なれバ。安身牢くゝびとこそやゝ我平生快性なるに係て。我夫のごとき人を見るに忍びざるゝ。武松ガ云。我兄のごとき事を惹出シて嫂く小憂ひを掛るとは。何由ぞ兄を嫌ぬふやと。未ダ云も羅くぶるに武大郎ハ。ゝや酒肉を調へて家ハ内ゆ。即ち樓ハ上り妻ハ対して云るゝ。汝ハ樓とり酒肉を傾へ来くんや彼妻ガ云我

夫ハ何ぞかく世事を知ぬさるや。我叔くハ俊侍シてこれのりいんぞよく樓とりくんや。武松ガ云嫂々ハの態勢のごとく云ぬふぞ。事めゝび冥くく樓とりぬふ。彼妻ハ此時又武大郎ハ対して。我夫宜くく速よ間壁の王婆を央て。酒食を具へしめゝ。武大郎これを聞乃ち王婆を傍来て酒食を具しめ。自ら運びて樓上に持来る。三人坐を対して。已に飲酌を始めり。彼妻武松ハ向て云るゝ。今日叔々初てゝぬ。何の欵待もこれなゝ。兄嫂の為ぬ。何ぞかく清心の言を云ぬふや。彼妻まく表眼ハ情を含で。只顧武松を看るゝバ武松又ハ対して。心中恐ひぬ。只管を低て一云事句も説話もるゝ。酒已に数盃巡りしゝ。武松乃ち別れを告て。漸く丈婦の欵待を謝シぬ。武大郎ガ云。汝何ぞ酒ゝんゝ云や。尚況を

砂て美音小唄を。武松が云沼已に足ぬ。再び來て訪ひやうんそ。
遂に樓を下りれば。武大郎夫婦も門くゝりてお送る。那妻が云叔く
近日必ず我家ゝ移り來ゝ。若移り來ゝんバ又もや夫婦他人に欺か
るゝ事ゝ。我頭ゝ一間の歌ゝ不を設て急にお待ゝ。武大郎
云て大に悦んで云。我妻が云不大に可なり。武松汝肯て
我家に移り來ゝ。汝婦の云ふ歌ゝ信ずるなれ。
ハ。ゝ小我家に移來て。樂夫婦が身心を安んぜしめよ。武松
云辭ずして云ふハ。既ふかくのごゝんが。今晩ふ迷
に移りやうんや。彼妻が云若今晩移り來ゝ。列して冥ゝ。
回てふく來り來ゝ。我ら夫婦ゝ。お待やうん。武松ハ此時兄の家を
辭して。直ちに縣衙ふ來り刑知縣ふ見て云。某が日胞の兄。

音ひ今此地の葉石街ふ居住に。某今晩ゝ彼家ふ移り住せん
と欲に。那ゝハ遂に命を奉つて移り。兄ゝ悦ぐせやと。知縣の云沒が
那ゝふ而ハ乃孝悌の事ゝ我何ぞ是を許ざゝんや。宜しく速に移り
但毎日自ら怠ずして。縣衙ふ來り云役を勤め上。武松ハそして
これを謝し。乃ち合の家紋を。尽く雜云ふ持せて。夜武大郎が
家に搬り移り。彼妻武松が移りして。恰も夜ふ金玉を拾ひし
思ひを已。夫ふ悦び地ふ悦んで。満面に笑を含ぬ。乃ち一部の房間を
設け。武松を駐まゝむ。武松も大に悦ひ。各を喜ハ体ゝ。翌日彼
妻忙しゝく起て。面を洗ひ口を漱ざ。又武松を請て日しゝく面を洗
ハゝむ。武松これを謝して。乃縣衙に弛其朝の役を勤。直ちに又ツ
時ふ至て再び立返りぬ。此時彼妻が云を洗ひ甲を剔。別して毎ゝ

風流小粧ひ。自〻食を投け。武松を清て吃せしむ。武松ハ原来酒性の人なれバ。阿嫂が自〻奔走まるとて。気酔の安んぜバ。再三慇懃に謝しに乃。彼妻又自〻一盞の茶を持げて。武松小与。武松忙しく受て云ハく嫂々自〻ハ飲るもよけれ。茶大ひにこれを思びず〻く坐立安んぜバ。縣糧ら一人の雑兵を呼ぶ。弦事これ小命じ。ぬふべし。彼妻が云。叔々ハ何の思ふかくの如き。慇懃の言を云ぬふぞ。糸毛一条の骨肉なれバ。我縱ひ叔〻小事ゑに。何の不可なるかの〻ん。彼雑兵を呼ぶ。ふ事ゑ。毛とつゑを能ハど。彼妻は皆鄙き淫なれバ。朝夕の飯食をゑとも。大ひに醜臓〻んなれバ。我亦これを思ふに思ふまじ。叔〻必彼妻を呼ぶ。ふとなれ武松が云雑兵ふが做てい。元清るまじ〻なれた。我いんぞ敢て嫂〻と労せんやとて

又云役に因て。毎日毎び縣糧へぞ絶ふ乃

ひ篇事出るれバ次の巻へつゞりて二十七回目の文へ

新編水滸画傳卷之弐拾壱畢